

『ローカル線から』

西脇市立西脇病院

病院長 岩井 正 秀

加古川線によく乗る。以前から時々使っていたが、昨年春に院長職を拝命して以来、阪神間に出かける機会が急に多くなり、頻繁に利用するようになった。自分で車を出せばいいのだが、あまり長距離の運転は得意ではなく、寝不足の時などはさらに億劫になってしまう。だからといって院長用の運転手を付けてもらうほどの余裕は、勿論あるはずもない。そういうわけで自然と電車を使うことになる。西脇から加古川までは45分の旅である。この加古川線は単線で、昼間は1時間に1本、すべて各駅に停車する。始発の西脇では乗客も少なく、長い座席の端に腰を下ろし、その日に必要な資料に目を通す。また、余裕がある時は文庫本を持って乗り込みしばしの読書の時間を得ることができる。さらに、天気の良い日には窓から田舎の風景を眺めているうちに、睡魔に襲われてしまうこともある。しかし、出かける要件が重要なものである時は、そうはいかない。以前も電車の中で、いかなる言い方をするのが良いのかを考えているうちに、いつの間にか独語状態となってしまう、周りから奇異な目で見られたことがあった。それからは、あくまで文言は頭の中で呟くように気を付けている。加古川で降りると、そこからは15分間隔で新快速があり、三宮には30分で着く。新快速に乗ると、なんだか急に都会の人間になった気がして、ついネクタイを直したりしてしまう。

院長になって院内の様々な部署の人たちと話をする機会が増えた。いまさらながら、こんなに多くの人たちの力によって病院は支えられているのだと実感する。色々な立場のスタッフ一人一人から話を聞くことによって気付かされたことも沢山あった。

チーム医療の重要性が言われて久しい。それは勿論承知しているが、チームがあればそれで十分かといえば、決してそうではない。やはりそのチームを構成する各スタッフの力量も大切である。チームを作ることによって安心することや、満足することは厳に慎まなくては行けない。医療の現場においては、その局面、局面における個の力は、重要であるし、チーム内でも切磋琢磨し、それぞれが能力を高めあうことが必要である。それが無いとチームの進歩や、機能の発揮は望めないであろう。しかし、ここでさらに大切なことは、そういったある種の力量や実力を持つようになった人たちが、変わらず協調性を保持していかなければならないということである。そうでなければ、やがてチーム内には反発が生じ、結局分裂してしまうことになってしまう。すなわち個

人としての能力を発揮しつつも、常に全体のことを考えることができる、そういう人たちが必要とされるのである。当院のようなスタッフ不足に悩む地域の病院において、人材に関して贅沢を言える状態ではないのは良く分かっている。しかし、それでもやはり、それぞれの病院の現状に適した医療スタッフによって組織を作っていきたいと考えるのは、誰しも同じではないだろうか。たとえ数少ないスタッフであっても、各々が揺るぎない向上心と協調心を持ってチームを作れば、医療は必ず良い方向に向かうと信じて止まないところである。

神戸での仕事を終わらせて帰路に就く。夕方の電車はいつも満員で空席は無く、加古川からも西脇が近づくまで座れないことが多い。窓際に立って暗くなっていく景色を眺めていると、隣の二人組の会話が聞こえてきた。年配の男が連れの後輩らしい男に向かって、地元西脇の名産である播州織のことを熱心に語っている。元の糸を一本一本きれいに染めているから、その糸を使ってしっかりと織ったものは当然素晴らしいのだと。西脇病院もまた、そうでなくてははいけない。地域医療はすべて、そうでなくてははいけない。

2015. 6 . 2